吹き出しの中の嵐

はっつぁん:ねえねえご隠居さん、面白い話を聞き込んだんだけどさ。某出版社では、マンガの吹き出しの中の「〜〜」をぜ〜んぶ「〰〰」に置き換えているんだってさ。

<https://lists.w3.org/Archives/Public/public-i18n-japanese/2021JulSep/0079.html>







ご隠居さん:ありゃりゃ、ご苦労さまな、こったねえ。長音のある種の雰囲気を出したいんだろうがね。「み〜んな元気」みたいに「〜」で長音を示す方法は新聞でも見かけるから，それなりに定着していいるようだが，それ以上の表現をしたいんだろうね。工夫しているというか，苦労しているねえ。ま、マンガの吹き出しに使われる「〜」や「〰」なんてのは、活版の時代には思いもよらなかったよ。

はっつぁん:え〜〜っ。てえことは、ご隠居さん、この手の問題、前からご存じだったわけで。恐れ入谷の鬼子母神。

ご隠居さん:あたりめえよ。何年この世界で生きてきているとお思いでえ。

「〰」と「〜」の問題を語らせりゃあ、ま、半日は持つね。

この、「〜〜」を「〰〰」に置き換える理由ってえのも、前回話した倍角ダーシと3点リーダーの関係みたいに、「〜〜」だと字間が空いちまって、「〰〰」だと字間がつながって見える、ってだけのようにも、思えるけどねえ。

はっつぁん:え〜〰っ。「〜」と「〰」って、どこがどう違うんで、やんすか。印刷雑誌の記事で、書いてあるからいいようなものの、寄席の高座で口演でやった日にゃあ、何が何だか分かりゃしねえ。

ご隠居さん:ワシのダチ公に、結構なマンガオタクがいてね。そいつの話だと、「〜」と「〰〰」とでは、使い方が違うんだそうだ。うめえ噺家だったら、高座でも、きっと使い分けが出来るぜ。

ご隠居さん:いずれにしても、まずは、「〜」から、もう少し、詳しく説明してやろう。

「〜」は、ユニコードでは、WAVE DASH(U+301C)という名前が付いておる。JIS X 0213では波ダッシュ。

元々は，「～」は，数学記号でね。戦前の古い印刷の本を見ると，この記号は，数学記号として掲げられている例がある（記述記号には掲げられていない）．

これが字形の雰囲気がいいからかねえ、「一八九五～一九六五年」のように範囲や，「東京～京都」の経路を示す約物として使用されるようになってきた．従来は「一八九五―一九六五年」，「東京―京都」というように，全角ダーシが使われていた．横組ではアラビア数字で範囲を示す場合，「1895–1965」のように二分ダーシが使用されることから考えると，ダーシの方がいいように思うがね。もっとも最近では，アラビア数字で範囲を示す場合でも「1895～1965年」とする方法も増えてるね。【ここのところに縦組の使用例の図版を入れる】





先輩の校正者の話だが、“元々“～”は，数学記号なんだから，範囲を示す約物としては適当でない”と主張されておったな。しかし，範囲を示す波形は徐々に増えていて、最近では縦組に限ればダーシはもはや少数派だな。なので、今日では“～”に数学記号という認識はどっかいっちまって。ワシは，古い人間なので、今でも範囲を示す場合，縦組では，全角ダーシを使うね。ま、言葉と同じで約物の用法も変化するので、いまや縦組では波形が多くなっているので，大勢に従うということなら，波形を使用するのがよかろう。



はっつぁん:あれれ、ご隠居さん。何だか、「え〜っ」の話とは、違うような。

ご隠居さん:こら、何を言うか。何事も、温故知新、よって来る理由が分からずに、議論が出来るか、馬鹿者。

大家さん:おやおや、はっつぁん、またご隠居さん相手に、愚痴こぼしかい。

WAVE DASHがどうのこうのとか、言いながら、時々、「ぐぇ〰〰〰っ」とか絶叫していたようだが。

「〜」とか、「〰」とかは、マンガの吹き出しでよく見かけるね。

おっと、「〰」の方は、WAVY DASH(U+3030)。どっちも、マンガの吹き出しでは、前の音を長くのばすときに、長音記号（ー）の代わりによく使われているね。

わたしは、何を隠そう、大家業を始める前は、バリバリの雑誌編集者で、マンガとかも担当していたことがあってね、エヘン。

ご隠居さん:そりゃ、初耳だねえ。人は、見かけによらないもんだなあ。

大家さん:まあ、40年も前の話ですがね。

「びっくりした〜」的な表記は、たぶん、マンガの吹き出しに写植（ネームと言っていましな）をはって、凸版やオフセットのために、1ページごとに写真取りをして製版していたのが、一般の印刷物にも波及していったのではないか、と。

すっころんで石に頭をぶつけたときとかの「◎△×？‼〜」とか。マンガ家が鉛筆で書き込んだネームを、大抵は、原稿にペン入れする前に編集者がコピーして、写植屋さんにバラ打ちしておいてもらって、原稿が完成してからはり込んでもらっていた。

このバラ打ちの時に、オペレーターが適当な（形が似ている）写植を文字盤から拾ってきていたわけで。

ダチ公のマンガ編集者に聞いた話ですけどね。写植時代は、「〰」（Wavy Dash）ではなくって、写植の飾り罫を使っていたみたい。まあ、わたしも含め、そのころの編集者なんて、写植屋さんがどんな文字盤を使おうが、それっぽい字形が出ていれば、ぜんぜんオーケーみたいな感じてしたからね。前回、はっつぁんが言っていた、全角スペースを二つ並べて、それに打ち消し線を入れて、2倍ダーシに見せていた、みたいな話もあるしね。

わたしが編集者だったころは、マンガの吹き出しは完全に写植になってましたが、吹き出しの外側では、結構手書き文字もあってね。最近の技術では《あ＋゜》みたいな字も、出せるようになりましたが、これも、元々は手書き文字から来ているような気がしますね。

写植での切りばりも結構やっていましたよ。わたし自身も、切羽詰まってやったことがあります。原稿の仕上げが遅いマンガ家の仕事場に、バラ打ちした写植を持ち込んで、ネームはりをやったりね。後から見ると、はり込みの曲がりが結構目についてね。プロの写植屋さんは、それこそ、ピタッとまっすぐにはり込んで、そりゃあ、見事なもんでしたよ。

そのころ写植機メーカーからもらった写植印画紙専用のハサミは、今でも愛用していますよ。

ガラ刷りが出て、ガラ稿で誤植を見つけると、凸版（鉛版と言っていました）に穴を開けて活字をはめ込んだり（象眼）ね。

吹き出しの仮名文字はアンチック体なのに、象眼した部分はゴチックで、ミスの修正が見え見え。

はっつぁん:なんだか、今回は、どうでもいい、昔話が多いなあ。

ご隠居さん:そういうことだよ、はっつぁん。要は、どうでもいい昔話のころに、印刷現場の職人さんやオペレーターが適当にやっていたことが、どういうわけか、印刷文化の伝統みたいな感じで、金科玉条化したことが結構あるからね。

はっつぁん:ってえと、WAVE DASHは、元々は数学用の記号だったのが、見てくれがいいからって、範囲を示す「ー」(DASH)の代わりに使われるようになったり、マンガの吹き出しの中で、「ー」(長音記号）の変形として使われるようになったってことですね。

大家さん:おっ。はっつぁんにしては、よく分かっているじゃねえか。

はっつぁん:「〰」もマンガの吹き出しの中では、「～」と似たようなもの、ってわけですね。

ご隠居さん:ところで。「〜」には、もう一つ、やっかいな問題があってね。

さっきも言ったけれど、波形は，もともとは数学記号として用いられていたのが、範囲を示す記号に代用されて定着したみたいなんだ。てえことは、元々活字組版では，横組の字形を90度回転させ，さらに反転させた縦組用の字形はなかった．縦・横で共通．最初の線は左から右という形しかなかった。ま、活字は、普通正方形に鋳込むので、活字の向きを変えるだけで，縦組と横組に使用できたわけ。

なので，1980年代までは，縦組に用いる場合，横組字形を単純に90度回転させて字形（最初の線が左から右に）が使用されてる例を見かけるね。

【敏さん＞＞このあたり、図版を入れるか、思い切って例を削除するか】

　例：下順二「訳」著“木下順二が語る 保元物語”（平凡社（かたりべ草子），1984.1.10，p.56）

　　　“世界”（1985.5.1，岩波書店，p.91）

ところが，1980年代の中ごろから，90度回転させた字形（最初の線が左から右に）が見られるようになってね、今日では，多くがというか，すべてが反転（最初の線が右から左に）させる字形が使用されている。すくなくとも，2020年以降で刊行された本で，横組字形を単純に回転させた字形は見てねえな。

例：“アステ　vol.3”（1986.11.1，p.13）

宇野功芳著“クラシック名曲・名盤”（1989.5.30，講談社現代新書，p.98）

どうも，手動写植やコンピュータ組版が使用されてきたことに影響されたのではと，思っているんだがね。．

てなわけで、縦組の波形の形は，反転しない形は間違いではないので，使うのはかまわないが，反転した形が定着しているのだから，現在では反転した形を使うのが無難だろうね。

大家さん:なるほどね、ご隠居さん。これで、ガテンがいきましたよ。例の、Wave Dashの字形の問題と、JISとUnicodeの対応関係の混乱。おっと、はっつぁんの生まれる前のことかもしれねえから、ちょっと昔話をしておくか。

といっても、話は結構ややこしいのでねえ。簡単に言っちまうと、ある時期、JIS X 2028の波ダッシュ（1区33点）に対応するUnicodeの符号位置に混乱があってね、WAVE DASH(U+301C)に対応付けしたOSとFULL WIDTH TIDLE(U+FF5E)に対応付けしたOSが混在していてた。それに、さっきご隠居さんがいった字形の問題が絡まって、ま、グチャグチャになっていた。今では、だいぶ落ち着いて射るみたいだが、この混乱のきっかけになったいわゆるShift JISが考えられた時期や、Unicodeの始めのころが、ご隠居さんが言っていたような、日本の印刷物で波形の字形が混在していた時期とが重なるわけよ。

どうも、今に至る記号類の混乱の起源を探っていくと、活字印刷から今のデジタル環境に移行する過程での、写植の時代に起こっているような感じだね。

ご隠居さん:フム。写植のオペレーターのことを悪くいうつもりはないが、昔の印刷屋の職人たちは、採字工にしても植字工（チョクジコウって読むんだぜ、えっ、はっつぁん）にしても、漢字の知識だけでなく、てえへんな教養人がゴロゴロいたもんだ。

はっつぁん:おっと、また、ご隠居さんの昔話が始まった。長くなりそうだから、帰ろっと。

主要な論点と将来展望

「〜」をめぐる、符号化上の混乱

この問題は、長い経緯があり、立場によって、考え方にも大きな相違が見られるが、現在では、電子書籍などでは、WAVE DASHに統一する方向で、字形的にも、おちついているようである。

以下に、時期が大きく異なる代表的な見方を複数挙げておく。

<https://srad.jp/~yasuoka/journal/357074/>

<https://internet.watch.impress.co.jp/docs/special/691658.html>

<https://qiita.com/kasei-san/items/3ce2249f0a1c1af1cbd2>

※JIS X 0213の例示字形を変更した折に、解説を載せたいのだが見つからない

意味の違いを反映した符号化の可能性

かつては、ユニバーサルタイプのタイプライターでは、アポストロフとクオーテーション、lと1を共有するものがあった（筆者が所有していたオリベッティLettera32など）。

視覚的には同じでも文脈で意味（機能）の違いが明瞭に分かったので、あえて区別する必要がなかったのである。今では、アポストロフィと引用符（開きと閉じ）には、別符号位置が与えられており、明確に区別することが出来る。ただし、一部には、7ビットアスキーの引用符(QUOTATION MARK U+0022)とLEFT DOUBLE QUOTATION MARK(U+201C)及びRIGHT DOUBLE QUOTATIO MARK(U+201D)との間で、若干の混乱が残っている。

「〜」や「〰」が、長音記号と同様な機能として用いられていることは、落語部分でも述べたが、現代的な符号化文字集合のアーキテクチャを前提とすれば、それぞれを、長音記号(U+30FC)の字形変異とみなし、Variation Selectorを用いて区別する可能性もありうる。

その場合も、表現としての「〜」と「〰」の間に、感情や強勢などの広義の表現の違いがどの程度あるかなど、ある種の吹き出しのグラマトロジーや記号類のセマンティクスといった議論が必要となるかも知れない。

謝辞

今回も、前回に引き続き、W3C JLreqタスクフォースにおける小林敏氏と田嶋淳氏の議論を下敷きとさせていただいた。また、今回は、一般社団法人ビブリオスタイルの村上真雄氏と小形克宏氏が、積極的に議論に係わってくださった。議論の場を提供してくださったJLreq議長の木田泰夫氏と併せて、深く謝意を表する。